

私は、この席で詩に対して与えられた尊敬を、詩に代わってお受けしました。ですから、取り急ぎそれを詩にお返ししたいと存じます。

詩は栄光の座を与えられることが滅多にありません。それは、詩の制作と、物質的な隷属関係に服する社会の活動との間の分離が、しだいに大きくなるように思われるからです。詩人はこの隔たりを甘受しますが、ことさら求めたものではありません。それは、応用科学以外の研究に携わる科学者にしても同じことでありましょう。

しかし、詩人にせよ科学者にせよ、この席で名誉を受けるのは、実利を度外視したその思想なのです。少なくともこの場では、彼らをもはや仲の悪い兄弟と考えるわけにはまいりません。なぜなら詩人も科学者も、同じ一つの深淵の上に同じ問いを投げかける、そしてただ探求の方法だけが異なっているからであります。

数学における絶対の中にまで純理的な限界を発見した近代科学の劇を考察する時、また物理学において、二大学説の一方が一般相対性理論を唱え、他方が不確定性の《量子》論を唱えて、物理学の尺度の正確さそのものを永久に制限してしまうかに思えるのを見る時、あるいはまた近代宇宙論の開祖であり、さまざまな公式によって最も広範な知的総合を保証した今世紀最大の革新的科学者が、理性の援けとして直観を呼びもと

め、《想像力は科学の発生の真の地盤である》と宣言して、ついには科学者に対し真に《芸術的なヴィジョン》の利点を強調するに到ったのを見る時——わたしたちは、詩という手段を論理という手段と同じく正当なものとなす権利があるのではないのでしょうか。

実を申せば精神の創造行為は、すべて言葉の固有の意味において《詩的》であります。そして、感性の形式と知性の形式とが相互に同じ価値を保ちながら、同じ一つの機能が、詩人の仕事と科学者の仕事にとってまず同等に働きます。科学の推論的思考と詩の省略法と、いずれがより遠くまで達するのでしょうか。またいずれがより遠くから出発したものでしょうか。この原初の夜の中で手探りする生まれながらの二人の盲人——一方は科学の武器を負い、他方は直観の閃きにのみ照らされておりますが、いずれがより迅速に高く駆け、いずれがより多く燐光の火花を

担うのでしょうか。答えは問題ではありません。神秘はいずれの場合も同じです。詩精神の偉大な冒険は、近代科学の劇的開幕にいさかも劣るものではありません。天文学者は膨張する宇宙という理論に夢中になることができました。人間精神の無限——この宇宙もやはり膨張しつつあります。科学がその限界をはるか彼方に拡げるにつれ、この限界の弓なりになった弧線上いたるところに、詩人が狩りしつゝ駆けて行く猟犬のざわめきがお聞かれるではありません。なぜなら詩は、よく言われてきたように《絶対的現実》ではないにせよ、この現実が詩の中にみずから告知するように思われるこの協力関係において、絶対的現実にも最も近く肉迫してこれを握もうとする渴望にはかならないからであります。

類推と象徴を用いた思考によって、媒介者としてイメージの照応関係によって、また反射作用と、相互に無縁なものを結合する連合作用によつ

て、さらには「存在」の運動そのものが伝えられる言語の活動によって、詩人は科学とは異なった超現実性を獲得します。これ以上痛烈なディアレクティックが、人間についてこれ以上多くのことを約束するものが、人間世界にあるでしょうか。哲学者さえも形而上学の入口から逃げ出す時、詩人は形而上学者を奮い立たせるのです。ですから、詩を最もうさんくさい眼で見た古代哲学者の表現にしたがえば、真の《驚異の娘》であるのは、哲学ではなく詩なのです。

しかしながら詩は、認識の様式である以上に、何よりもまず生命の——しかも完全な生命の様式であります。詩人は穴居人の中にも存在しました。原子時代の人間の中にも存在するであります。なぜなら詩人は、人間の中の不拔の部分であるからです。宗教そのものも、霊の要求として詩的要求から生まれました。そして神性の火花は、詩の恩寵を通じて

人間という火打石の中に永遠に生きるのです。神話が崩壊し去る時、神性は詩の中に避難所を見出します。おそらくは中継地さえ見出すであります。そして社会秩序や、人間の直接与件においてまで、古代の行列のバンを運ぶものが松明を運ぶものに席を譲る時、光明をもとめる多くの人々の高邁な情熱は、詩的想像力に照らされて燃え上がるのです。

永遠を担いつつ歩み行く人間の誇りよ……新たなヒューマニズムが開ける時、人類と普遍的現実と完全な霊性とを背に負って歩み行く人間の誇りよ……人間の神秘を深めること——この自己の務めに忠実な現代詩が手を着けた企てを追求するのは、人間の十全な完成にかかわることです。かかる詩には神がかりなものはいささかありません。純粹に美的なものはありません。現代詩は、単に香りをつけたり飾り立てたりする技術ではありません。教養の真珠を養殖するものでもなければまば

ろしや紋章を売り物にするものでもありません。また、如何なる音楽の祝祭に満足することもできません。それは進み行く途上で美と婚姻を結びます。崇高な婚姻ですが、しかし詩はそれを目的とすることはないし、唯一の糧とすることもありません。芸術を生命から、認識を愛から分離することを拒む、すなわち詩は行為であり、情熱であり、力であり、そして常に限界を拡げてゆく革新であります。愛はその中核、不服従はその旋、そしてその領域は、すべてに先駆けるところ、あらゆる場所にあります。詩は不在や拒否であることを決して欲しないのです。

しかしながら詩は、おのれの時代に有利な地歩を占めようと望むものではありません。おのれ自身の運命に密着しつつ、あらゆるイデオロギーに捉われぬ詩は、生命そのものと同等であることを自覚し、したがって自己弁護を必要としないのです。そして詩は、単一の生けるストローフ

として、現在においてすべての過去と未来を、人間的なものと超人間的なものを、遊星の全空間と宇宙のひろがり、いちどきに抱きしめるのであります。詩は晦渋さゆえに非難されておりますが、それは詩の本質に由来するものではありません。詩は本来照らし出すものなのですから、晦渋さは、詩が夜を、つまり魂そのものの夜、人間存在がトッブリ浸っている神秘の夜を開拓しつつあり、また開拓しなければならぬということに由来しております。詩の表現は常に曖昧なものをおのれに禁じてきました。しかもそれは、科学の表現と同じく厳しい要求を抱くのであります。

こうして詩人は、現存するものに全面的に密着することにより、わたしたちに代わって、「存在」の恒久性および統一性と関係を結びます。その教訓は楽観主義であります。詩人にとって、事物の世界全体は、同じ

一つの調和の法則に支配されています。そこでは、本来人間の尺度を越えるものは何ひとつ起こり得ません。歴史における最も恐るべき動乱さえ、連鎖と変革とのより一層広大なサイクルから見れば、単に季節のリズムでしかないのです。そして、松明を高々と掲げて舞台を横切る復讐の女神エリーニエス（フェーリー）も、進行しつつある非常に長いテーマを一時照らし出すだけであります。成熟しゆく諸文明は、決して秋の凋落の苦しみによって死ぬものではない。ただ脱皮するだけであります。恐るべきは無気力、ただこれのみです。詩人とは、わたしたちのために慣習を打ち破る人間なのです。

こうして詩人はまた、否応にかかわらず歴史的事件と結びつけられています。したがって、彼の時代の如何なるドラマも彼に無関係ではありません。されば詩人はすべての人々に対して、この苛烈な時代を生きぬく

意志を、はっきりと宣言しなければならないのです！ なぜなら、新たに自己を把握すべきこの時代こそは、偉大な新時代であるからです。でなければわたしたちは、わたしたちの時代の名誉を、一体誰に委ねればよいでしょうか？……

《恐れるな》と「歴史」は、ある日その猛々しい仮面を脱ぎ捨てて言います——そして「歴史」は腕を振り上げて、破壊の舞いのさなかであのアジアの「神」の和解的な身振りをまねるのです。《恐れるな、遅疑するな。——懷疑は不毛、恐れは卑屈だ。むしろ高々と振り上げたわが腕が、すべてを更新しつつ、常に創造の途上にある人間の大きいなるフレイズに刻み込む律動の響きを聞くがよい。生命が自分自身を否定し得るというのは真実ではない。無から生じる生命はなく、無に熱中する生命もない。しかしまた、「存在」の休みなない充溢のもとでは、何ものも形や



尺度を保たないのだ。悲劇はメタモルフォーイズそれ自体の中にあるのではない。現代の悲劇は、世俗的人間と永遠的人間との間に増大して行く分離の中にある。一方の傾斜に明るい人間は他方の傾斜に暗くなるのだろうか？　そして、その強いられた成熟は、霊的共同を欠いた共同体の中にあつては偽りの成熟にすぎないのではあるまいか？……》

わたしたちの間で、人間の二重の使命を証言すること、それこそ詩人に共通の務めであります。そしてそれは、精神が担う霊的機會をより一層はつきり映し出す鏡を、精神の前に高々と掲げることにはかなりません。それは現代のただなかで、原初の人間によりふさわしい人間の条件を呼び覚ますことでもあります。それはまた、この世をめぐる霊的エネルギーの流れの中に万人の魂をより大胆に浸すことでもあります……核エネルギーに直面して、詩人の粘土のランプは果たしてその務めを果たすに足

りるでしょうか？——然り、果たすに足りる、もし人間が粘土を思い起こすならば、であります。

そして詩人にとっては、おのれの時代の痛める良心となることで充分なのであります。

(一九六〇年二月一〇日)